

JSST 2012 開催報告¹

陰山 聡 (JSST 2012 実行委員長)
神戸大学 システム情報学研究科

2012年9月27日と28日の二日間にわたり、神戸市ポートアイランドにおいてJSST 2012 (International Conference on Simulation Technology、第31回JSST年会)を開催した。主催は日本シミュレーション学会および神戸大学システム情報学研究科、会場は神戸大学統合研究拠点ビルとその隣の建物にある兵庫県立大学、計算科学振興財団の会議室などをお借りした。これらの建物は京コンピュータの設置された理化学研究所 計算科学研究機構 (AICS) に隣接している。

ご存じの通り、日本シミュレーション学会ではここ数年にわたり、少しずつ年会の「国際会議化」を行ってきた。日本語によるセッションと英語によるセッションが混在し、その割合が毎年変化してきたが、今回の会議JSST 2012では、ついにすべてが英語セッションとなった。初めて完全に国際会議化されたという点で記念すべき会議となった。規模の上でも、参加者総数187名、論文総数144本という比較的大きな会議となった。

プログラムについて簡単にまとめる。レギュラーセッション一つに、オーガナイズドセッション(OS)は10件であった。それぞれのセッション名は以下の通りである。

OS1: Simulation Techniques of Electromagnetic Fields Analysis

OS2: Numerical Simulation and Visualization of Nonlinear Problems

OS3: A Variety of Communication and Mutual Communication

OS5: HPC Joint Session: Computational Fluid Dynamics

OS6: HPC Joint Session: Plasma and Fusion

OS7: HPC Joint Session: Geophysics & Astrophysics

OS8: Advanced Computer Simulation for Biomolecules and Nano Materials

OS9: Visualization in Immersive Virtual Environment

OS10: Simulation of Instrumentation and Control Application

OS11: Modeling and Simulation Technology for Social Systems

¹ 日本シミュレーション学会誌 “シミュレーション” vol.31, pp.69-71 (2012)

このうち、OS5 から OS7 までは、HPC Joint Session という今回独自に行った試みである。HPC (High Performance Computing) 関係のセッション 3 つを新たに作っただけでなく、その 3 つをできるだけ融合した形で開催しようという試みであった。過去のプログラム等を見ると、本学会は HPC コミュニティとのつながりが多少弱い面のあったように感じられたので、この会議を機会に HPC の研究者達とシミュレーション学会をつなげるきっかけになればという気持ちもあり、企画した。

特別講演は以下の 3 名の先生に御願ひした。

- Prof. Mitsuo Yokokawa
 - ▶タイトル：The K computer and first results by trial access
- Prof. Takuya Matsuda
 - ▶タイトル：Boltzmann Particle Hydrodynamics Methods and its Application to Cosmic Gas Flow
- Prof. Zhi-Wei Luo
 - ▶タイトル：Innovation On Human Interactive Dynamic Simulation for Health Engineering

このうち初日の午前中に行われた Yokokawa (横川) 先生の特別講演は、テクニカルツアーとの連携企画として行われた。京コンピュータの開発チームメンバーの一人である横川先生から、京の開発経緯や性能、初期の成果などについて詳しいお話を聞かせていただき、午後にはテクニカルツアーとして（すぐ隣の建物にある）京の実物を見学した。見学会の参加者は約 120 名であり、大変好評であった。京コンピュータの完成後より、様々な団体による見学は数多く行われており、通常は広報担当者によって説明がなされるようであるが、今回の見学会では開発者である横川先生ご自身が直接解説していただけるという極めて贅沢な「特別待遇」であった。また、この見学会では神戸市の企業誘致推進室にも大変お世話になった。

初日の夕方にはバンケットを開催した。参加者に神戸らしい思い出を残していただけるよう、クルーズバンケットを企画した。台風が心配であったが、幸い天候に恵まれ、海から見た神戸の夜景を楽しむことができた。このバンケットの中で、シミュレーション学会の学会賞と前年の JSST 2011 での Presentation Award および Student Award の受賞式が行われた。

財務関係について： 伝統のある国際会議では毎回の参加者数のデータが蓄積されているので開催前に参加者数がある程度予想できるが、初めての完全国際

会議となった今回の会議はそうではないので、参加者数（従って参加費収入）があらかじめまったく予想できず、準備を進める上で大きな障害となりそうであった。しかし幸いなことに今回の会議開催に当たって、以下の基金・財団・協会から会議開催助成金をいただくことができた。

- ・神戸大学 益田奨学基金
- ・内藤泰春科学技術振興財団
- ・神戸国際観光コンベンション協会
- ・前田記念工学振興財団

これら基金・財団・協会には深く感謝したい。特に前田記念工学振興財団からの助成金により、海外からの参加者4名（中国、イギリス、タイ、マレーシア）にそれぞれ旅費の援助を行うことができた。実は、これ以外にも助成の内定をいただいた財団があったが、会議開催が近づいた段階で、赤字は避けられそうな見込みとなったので、助成は辞退することにした。

展示ブースについて：参加費収入と財団からの助成金に加えて、展示ブースも含めた広告料が大きな収入源である。今回は幸い計13もの企業・団体にブースおよび広告を出していただいた。参加者数と同様に企業展示ブースに何社申し込みがあるかどうか最後までわからなかったのも準備段階での懸念材料の一つであった。幸い予想以上の数の出展社が集まったが、それだけに次に心配したのは、会議当日、ブースに人が集まるかどうかであった。企業としても安くはない展示料金を払った以上、それに見合った効果を期待するのは当然である。一定の来場者が見込めれば、次年度も続けて出展していただける可能性が高まる。今回のJSST 2012では、いくつか工夫を行ってなるべく展示ブースの前に人が集まるようにした。例えば特別講演の会場前をブース用のスペースとし、コーヒーやドーナツ、ランチチケットを手に入れる場所をあえて奥の方に設置して、展示ブースの前を歩いていかなければいけないようにした。参加者には多少不便に感じた面もあったかもしれないが、このような意図があったということでご了承いただきたいと思う。

Award 関係について：昨年度のJSST 2011に引き続き、今回のJSST 2012でも Outstanding Presentation Award と Student Presentation Award という二つの賞を設定した。受賞候補者を各セッション毎に選び、その中から最終的な受賞者を選ぶという手続きも昨年と同様である。各セッションの受賞候補者の選出は Session Chair に御願いをした。受賞者は来年のJSST 2013において発表・表彰される予定である。

論文について：論文（Extended Abstract）投稿締め切りは5月16日、査読結果の通知は6月8日、改訂後の論文（Full Paper）締め切りは8月15日であった。締め切りに関しては、著者と査読者の皆様に強引とも言えるほどの強いプレッシャーをかけた。このスケジュールは、「与えられた条件の下、論文著者の時間的余裕を最大化する」という方針でたてたものであり、ギリギリのスケジュールであった。そのしわ寄せは査読者と実行委員会にいくことになった。査読をしていただいた方々にはこの場で深く感謝したい。

昨年度に引き続き、論文投稿のためのウェブシステムとしてマイクロソフトリサーチが提供するCMTを利用した。論文関係はPublication Chairである小西先生（工学院大）が一人で管理、運営された。小西先生一人に負担が集中している現状はなんとかしなければいけない。この点は今後の課題の一つである。

論文査読に関して今回工夫を加えたのは、論文投稿時にそれぞれの論文の対象分野を科研費の分野細目リストから分野番号を使って指定するようにしたという点である。この会議の性質上、投稿される論文は工学、理学、医学から社会科学まで様々な分野にわたる。小さい規模のオーガナイズドセッションであれば、そのオーガナイザーがその論文を見れば適切な査読者を判断することができるであろうが、レギュラーセッションや今回のHPC Joint Sessionのように、幅広い研究分野の論文が集まるオーガナイズドセッションではそういうわけにもいかない。従来は投稿時に入力してもらったキーワードをヒントに査読者を割り当てていたが、それには限界がありそうだったので、今回新たな試みとして科研費の分類を利用した。投稿者には余分な負担をかけることになったが、運営する側としては、そのおかげで査読割り当てを順調に進めることができた。

開催準備について：会議開催の約11ヶ月前、2010年10月末から本格的な準備を開始した。まずは地元神戸大学を中心とした実行委員会を組織し、すぐに会場の確保と各種財団への助成金申請を行った。次にウェブサイトを開設し、ポスターとチラシを印刷した。ポスターは全国の大学・研究機関200カ所以上に郵送し、チラシはシミュレーション学会の会報に同封してもらうなど、合計1000枚近くを配布した。これ以外にも各種学会関係のメーリングリストに会議の宣伝を流した。

全体として：こちらの不手際や至らない点も多くあったとは思いますが、実行委員長としては、深刻なトラブルもなく、いくつかの新たな試みもどうやううまくいった今回の会議はおおむね成功と「自己評価」したい。しかし、いくつか反省点もあり、そこには構造的な問題もあるように思うので、最後にそれにつ

いて述べる。

今回の会議では、全参加者 187 名中、シミュレーション学会正会員はわずか 37 名、一方、他学会の研究者（つまりシミュレーション学会の会員ではなく、かつ学生でもない参加者）はその倍以上の 82 名であった。正会員の 37 名というのは、全体の 20%以下である。一つの国際会議としてみればこの割合は全く問題ではないし、今年は例外的に割合が少なかつただけかもしれないが、一般論として 37 名しか正会員が参加しない会議を学会の年会として「も」位置づけようというのは無理があるのではないか。

よく知られているように、国際会議のあり方や論文、査読、プロシーディングスの位置づけ、その出版方法など、分野毎に慣習や常識は全く異なる。そのような中、決して多数派ではない本学会の慣習を基準にして会議を運営するのは実行委員長の立場としては苦しい場面が多かった。今後は、この現状に合わせた、ある程度の意識的な適応が必要なのではないかと思う。むしろその方が他分野の方々を本学会に引き込んでいくことにつながるのではないか。

中でも、プロシーディングスとその扱いに関しては、多くの参加者の認識や希望と現実との差が大きく、それだけ不満も大きかったように思う。今回のプロシーディングスは、USB メモリに入れて参加者に配布したが、著者も査読者も、そして編集に関わった我々実行委員会メンバーもかなりの努力を注いで作ったこのプロシーディングスが、このままだと闇に紛れて消え去ってしまうような気がする。これは実にもったいない。他の学会などで行われているようにプロシーディングスを電子出版の形で残し、できれば広く公開すること等も含めて検討すべきではないか。今回、我々はこの点を何とか改善できないかと努力したが、残念ながらかなわなかった。

最後に：他の国際会議と違って伝統という無形の財産をもたないこの国際会議は、様々なことを試行錯誤で進めて行かざるを得ないところがあり、裏方としては通常以上の苦労がある反面、良き伝統を作り出していく貴重な機会でもあること、その意味では、枠のない自由で長期的な感覚を常に意識しながら準備を進めることができた。我々のささやかな努力が来年の JSST 2013（明治大学）の成功へとつながり、さらには良き伝統へと進化していくことを祈りたい。